
ゴールデンタイムラバー

九十九 裕樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴールデンタイムラバー

【Zコード】

Z5075P

【作者名】

九十九 裕樹

【あらすじ】

不幸で天才でオタクな人として何か残念な感じの高校生日向亞紀。^{ひゅうが}

なぜかそつち系の知識を携えた地獄の悪魔少女に召喚された先は、剣と魔法が飛び交うファンタジーワールドだった。

我が儘王女や国一番の勇者に会いながら、亞紀は戦乱の世界に巻き込まれてしまう。

注：数多くのパロディネタが出てくる予定。そして主人公が超絶的に強い予定です。そういうのが嫌いな方は今すぐカムバック！！

気に入らない（前書き）

いちお一警笛として残酷な描写がありとなつていていますが、正直気に
しなくとも問題ないかと。そのままクリックしてレッツゴーしても
かまいませんと書つか、してくださいwww

気にするな

どこか遠く、この世のものではなく、いや、もしかしたら近いのかかもしれない。

そんな世界に、一人の少女がいた。

「「めんね、亜紀君。こんなことに巻き込んで。私はや、こんなつもりで亜紀君を呼んだんじゃなかつたんだけどなあ……。どうしてこうなつちやつたんだうづね」

一人は長い金髪に金の瞳を持つ少女。

「別にテメーが気にすることじやねーよ。お前は助けを求めた。それに俺が応じた。それだけじやねーか。テメーが気にすることなんざ一つもねーよ」

一人は、もとは長かつたであろう黒髪が肩あたりでバッサリと切れ、全身に傷を負った黒目の少女。

「でも、そのせいで亜紀君死んじやうんだよー? ううん、死ぬだけならまだマシ、もしかしたら魂」と消えちゃうかもしれないいんだよー?」

金髪の少女が黒髪の少女を抱きかかるようにしてぺたりと座っていた。

「さすがの神様もそこまでひどくはねーだろ。……ああ、その神様

つてーのは俺が消しちまつたか

金髪の少女に抱えられている少女はそのままと血潮氣味に笑つた。

「とにかくだ、テメーは何も気にしなくていいんだよ」

黒髪の少女は傷だらけの腕を上げて金髪の少女の頬にやさしく触れた。

「最初にこっちに来たとき、冗談じゃねえって思った。最初に説明を聞いたとき、ふざけんじやねえって思った。最初に闘ったとき、力がみなぎるようだつた。最初に戦場に出たとき、生まれて初めて人の死に出会つた。最初にアミリアに会つたとき、五月蠅い奴だと思つた。最初にアスカに会つたとき、面倒な奴だと思つた。そこでお前に最初に会つたとき俺は生まれて初めて他人を好きになつた。お前の笑顔が愛しいと思つた。お前を失うのが……怖いと思つたんだ……」

黒髪の少女は金髪の少女に向かつて、今度は優しく微笑んだ。

「だからさ、俺がしたことは気にはすんな。俺はお前が笑つてくれたらそれでいい。ホントは人間なんてどうでもよかつたんだ。世界なんてどうでもよかつた。俺はただお前を救いたかったんだよ」

ポツ、ポツ、と黒髪の少女の顔に涙が垂れてくる。

「どうしてそこまでしてくれるので……？ 私、私のせいでも……こんなに亞紀君傷ついてるのに……ーー」

「決まつてんだる……？」

黒髪の少女は指でそれを拭つてやる。

「俺がお前の救世主様だからだろーが」^{メシア}

召喚とか召喚とか召喚とか

「やつと見つけた……」

周りは、例えるなら森林と呼ぶにふさわしいような場所で、鬱蒼と生い茂った樹木や草、菌類などが整然と、人にそろえられたかのように生えそろっていた。そんな森の中で一人の少女が円形の幾何学模様の中心の何もないところを見つめて、そう呟いた。

幾何学模様の中心にはまるでテレビの映像のよう一人の少年が映し出されていた。その少年はベッドに寝転んで漫画を読み耽っている。

「ホント……きれいな顔……。これが……この人が長年探し求めた

……」

金の髪を持つその少女は感極まつたよつてそつ陔へと、幾何学模様の中心に手を置いた。

「じめんね、亜紀君。ホントは巻き込みたくないんだけど……これも亜紀君の運命なのかな、どうしようもできないんだ。じゃないとこの世界が壊れちゃうし

自分に課せられた使命や責務を思い、一人その亞紀という少年に謝る少女。それと同時に、少女の背中に一対の猛禽類の羽が生えたと思つたら、真つ白だつたその羽は一瞬のうちに漆黒に染まり、そして彼膜が広がる悪魔の翼へと変化した。

少女は幾何学模様に触れている手から何かを流し込むと、幾何学模様が眩い光を放ち始める。

「……ごめんね、亞紀君。亞紀君の体」この世界には含わないみたいだから少し変えさせてもらうよ。びっくりするだらうけど、許してね。私にはどうする? ともできないんだ」

光が徐々に収束していく。だんだんと中央に集まっていく。すべて集まり終わると、少女はすまなそうに目を伏せて呟いた。

「 召喚 」

願わくばどうか、この者が私を救う救世主^{メシヤ}であらんことを

小さいころから人間が嫌いだった。狡いし汚いし自分勝手だし醜いし。周りの人間を見るたびにそう思わずにはいられなかつた。

それでもそんな自分は世間一般の常識からは外れているのは分かっていたし、自分が何を言ったとしても何も変わらないことなんて目に見えていたし、そして何よりもめんどくさかつたから、とりあえずそんな自分は隠していた。これが俺なりの処世術つてやつだ。

人並みに人付き合いはしたし、人並みに遊びもしたし、大体のことは人並みくらいはやつていた。まあ、どっちかって言うと人並みくらいに落ち着けていたといった方が合つてるけど。

天才だ、とか言われて騒がれたくなかつたし、俺からしてみれば

周りの奴らができるさすがるだけで、特別自分がそんなにすごいとは思っていなかつた。

あ、別に人間が嫌いだつて言つても別に雲仙先輩みたいに人間の全部が嫌いつてわけでもないし、琢磨川さんみたいに滅ぼしてやろうとか、そんなことはべつに思つてたりはしない。めんどくさいしそんな力はないし。

まあ、いなくなつても別にかまわないくらいの気持ちだつた。（漫画家とかアニメーターとかライトノベルの作者は別だけど）

そんな俺にも、人間の好きなところはある。言ひ気はないけど。

……とまあ、そんな現実逃避気味のお話を脳内で展開してももちろん現実はどこかに飛んでいつはくれないわけで。

俺は田の前というか周り全部を囲む森林を見て、ついでに田の前にいる金髪ゴスロリ娘を見て一言。

「うー、どうやねん ー？」

ぬくとかぬくとかぬくとか（後書き）

とうあえず今回はいいまで。モバゲーと違つて書く量多いから疲れるわ。次回の更新はいつになるかわからないけど、とうあえずまたくるわwww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5075p/>

ゴールデンタイムラバー

2010年12月25日18時10分発行